

広島市立大学入学者選抜模擬問題

一般選抜後期日程 (国際学部)

小 論 文 (90 分)

2020 年 6 月公表

本問題は、2020 年度に実施する広島市立大学国際学部一般選抜後期日程の受験者のために作成した模擬問題です。学習する際の参考資料としてください。

問題

次の文章をよく読んで、あとにある問いについて論じなさい。

SNS有害論とウェルテル効果

たとえば、2017年10月に発覚した座間9遺体事件のマスコミ報道で見られたSNS批判である。白石隆浩被告（当時27歳）はツイッターで自殺願望のある女性に「一緒に死のう」などと呼びかけ次々と殺害していた。こうした猟奇的事件が起こると、毎度のことだが有害メディア論を声高に訴える評論家がテレビのワイドショーなどに現れる。曰く「SNSがなければ事件は起こらなかったかもしれない」「自殺や犯罪につながる危険性を孕むSNSへの青少年のアクセスは、もっと厳しく取り締まるべきだ」。新聞紙面でも規制強化を促す解説記事が目立った。たとえば、「過去に社会問題化したネットの「自殺サイト」などに代わり、SNSが自殺や犯罪誘引の温床になりつつある」（2017年11月1日付『毎日新聞』）。

本当にそうだろうか。SNSがなかったとして、今回の被害者たちの悩みを親身になって聞いてくれた隣人はどれくらいいただろうか。リアルな人間関係で自殺の悩みを口にすることは至難である。現実には彼女たちの「つぶやき」に反応してくれた人はSNSの中にしかなかったのではないか。まずこの事件から考えるべきは、SNSを積極的に利用した自殺志願者への支援策だろう。

数年前のことだが、臨床心理学分野の講演会に講師として招かれたときの出来事を思い出した。私の前に基調講演をした著名な評論家は、いじめ・犯罪の温床となる子どものスマートフォン利用を即刻制限すべきだと主張した。「毎年、これで何人も自殺者が出ているのです」。さすがにメディア研究者として私は黙っておれず、自分の講演であえて挑発的にこう述べた。「本を読んで自殺した人の数のほうがもっと多いのではない

だろうか」。

メディア効果研究では「ウェルテル効果」がよく知られている。それは「ドイツ文学史上、初のベストセラー」として有名なヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『若きウェルテルの悩み』（1774年）に由来している。同書は各国語に訳され、主人公ウェルテルをまねた自殺者が続出したことでセンセーションを引き起こした。そのため、この小説はザクセン王国、ハプスブルク帝国などで発禁処分になっている。

一般に「ウェルテル効果」とは、マスメディアで自殺が大きく報道されるほど自殺率が上がることを意味している。アメリカの社会学者デイビッド・フィリップスはアメリカの自殺統計と『ニューヨーク・タイムズ』第一面の自殺記事数の相関を分析して、報道が自殺率に影響すると主張した。ここで重要なポイントは、ウェルテル効果が「報道」の影響を問題にしており、「書物」や「新聞」といった個別メディアの有害性を示す仮説ではないということである。

18世紀ドイツの若者が熱中した『若きウェルテルの悩み』は年配者に敵視されたわけだが、今日この著作は教養小説の古典として名高い。同じように、我が国でも明治期には小説が不良化の温床として批判され、大正期には映画、昭和期にはテレビ、そして平成に入ってからケータイやネットが、青少年への悪影響を理由に糾弾されてきた。いずれも聡明とはいえない猜疑心からの俗論であり、メディア史的思考を欠いた偏見である。こうした悪しき因習を取り除くため、以下のような思考実験を私は提唱している。

サイバー・ノマドの「つぶやき」

まず、書物よりもSNSが先に普及した「未開社会」を考えてみよう。たとえば、工業化を経験せずに情報化した遊牧社会である。そこには学校も新聞も書籍もなかったが、経済のグローバル化でスマートフォンがまず普及した。SNSを駆使する遊牧民ノマドの社会に、ニューメディアとして書物が出現したとしよう。

スマホのような伝統メディアに無関心な「新人類」たちは目新しい紙の書物に熱中する。さらに、書物というニューメディアの蒐集しゅうしゅうを始めるオタク、出版業というベンチャービジネスに乗り出す起業家も現れた。SNSの伝統的環境で育った年配のノマドはこの事態に驚愕し、若者を告発する「つぶやき」をツイッターでこう連投していた。

- ・書物は五感を鈍らせ、生活から活力を奪っている。色鮮やかで躍動感あるデジタル映像の伝統に育まれた感性は、白黒だけの退屈な活字では満足できない。脳全体をフル稼働させるデジタル文化に対して、読書中の言語処理で利用される脳領域はわずかであり、子どもたちは恐るべき“読書脳”になってしまう。

- ・コミュニケーション力の発達を阻害する書物こそ、青少年の「引きこもり」の最大要因である。驚くべきことに、一日何時間も個室にこもって書物を読んでいるのだ。とくに若者に人気の「教養小説」は観念的で異常な性欲を亢進させて、モニター画面に映る正常で素朴な異性愛への適応不能を引き起こしている。

- ・また、図書館などという悪場所に通いつめ、問題行動を起こす若者も少なくない。楽しいおしゃべりが絶え間なく続くSNSの社交空間を拒絶して、不気味な沈黙が支配する公共空間で書物を読んでいるのだ。こうした消極的な行動様式の広がり、現在深刻な少子化の一因であることはいうまでもないだろう。

- ・それ以上に恐ろしいのは、書物が格差社会化を加速させていることだ。伝統的なデジタル文化では思想や感情の創作的表現はコモنزとして自由に活用され、知的財産権の主張は社会的に抑制されてきた。ウェブ上の知的創作物はフローな状態のままで私的にストックされず、知識格差は可視化されなかった。

- ・しかし、書物は違う。オリジナリティーとか著作権とかの屁理屈を並べ、知識やデザインにまで財産権を主張している。そうした悪の象徴が個人蔵書である。自らの知識量をひけらかすためだけに書物を私有する愛書家たちは「知の守銭奴」であり、社

会的平等など一顧だにしない。許しがたい差別主義者である。

・読書脳のフリークどもが変態の差別主義者であっても、ごく少数ならば仕方のないことだ。病気のだから。真に脅威なのは、こうした読書人の受動性が世代を超えて拡大し、デジタル社会をシニシズムで汚染することだ。私たちはSNSで双方向の対話型コミュニケーションを身につけた能動的な市民である。

・私たちは出会い系サイトにも挑戦し、匿名掲示板に毎日書き込む参加型の公共生活を営んできた。しかし読書人はただ他人の思考を書物でなぞるだけで、街頭に出て誰かに語りかけようとはしない。健全で平等な情報社会を守るためには、若者の書物閲読を制限し、私的所有を禁じることが喫緊の課題である。

お気づきのように、この140字の連続ツイートの内容はテレビやゲーム、ケータイに対してこれまで言われてきた有害論をかき集め、その対象を書物に置き換えただけの創作文である。それでも十分に話の筋は通る文章になってしまうことが問題なのである。

つまり、ニューメディア有害論とはどんなメディアについても当てはまる万能薬の如き議論なのである。多くの読者は「何にでも効く薬」の広告とあれば、まず懐疑心を抱くはずだ。しかし、万能の有害メディア論には簡単に引っかかる。こうした議論の虚構性を見抜く眼識を養うためにもメディア史的思考は必要なのである。上に紹介したメディア有害論も典型的なメディア流言である。

というのは、一般の生活者が社会の変化を最も敏感に感じ取れる表現がニューメディアだからである。その有害論は伝統的な生活習慣に固執したい年長世代が抱く変化への違和感を正当化してくれる。科学技術の発展や進歩そのものに公然と反対を表明する人は少ない。しかし、それがもたらす生活の変化に反発する心情は年長世代の多くに共有されており、それがニューメディア有害論の受け皿となる。さらに言えば、広告市場に新規参入するニューメディアに対する既存メディアの経済利害も、そのメディア流言の

拡散に大きく寄与している。

「メディア流言」とは何か

フランスの社会学者ジャン＝ノエル・カプフェレは、うわさ／流言を「もっとも古くからあるマスメディア」と定義している。その定義に従うなら、うわさは「メディア」であり「流言」であるため、ここで使う「メディア流言」は重複表現—「昼食のランチ」や「新しいニューメディア」など—のように受け取られるかもしれない。しかし、以下で分類するくちコミの流言と区別して、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどの広告媒体（メディア）で伝達される「あいまい情報」をとくにメディア流言と呼ぶことにする。

またここでは社会心理学者が行う厳密なうわさ／流言の定義は必要としないが、一応の整理だけはしておきたい。うわさ（うはさ）の語源は、^{うねべ}上辺、皮相を意味する接頭語「うは」を話題や知らせを言いする「^{きた}沙汰」に重ねた「うはさた」の省略形とされている。すなわち、根拠がはっきりせず、真偽の確証がむずかしい情報であり、先行研究では基本的な情報経路である口伝え、いわゆる「くちコミ」に焦点が当てられてきた。うわさ (hearsay) は、有害性の度合いが高い順にデマ (demagogy)、陰謀論 (conspiracy theory)、流言 (rumor)、ゴシップ (gossip)、都市伝説 (urban legend) などに大別できる。

出典：佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、2019年より抜粋。

必要に応じて、一部表現を変えている。

問 本文では、ニューメディアに対する有害論とオールドメディアに対する有害論が共に成立すると述べられています。ニューメディアとオールドメディアのそれぞれの特徴をふまえたうえで、あなたはメディア流言に対してどう対処すべきだと考えますか。具体例をあげながら、1000字以内であなたの意見を述べなさい。